

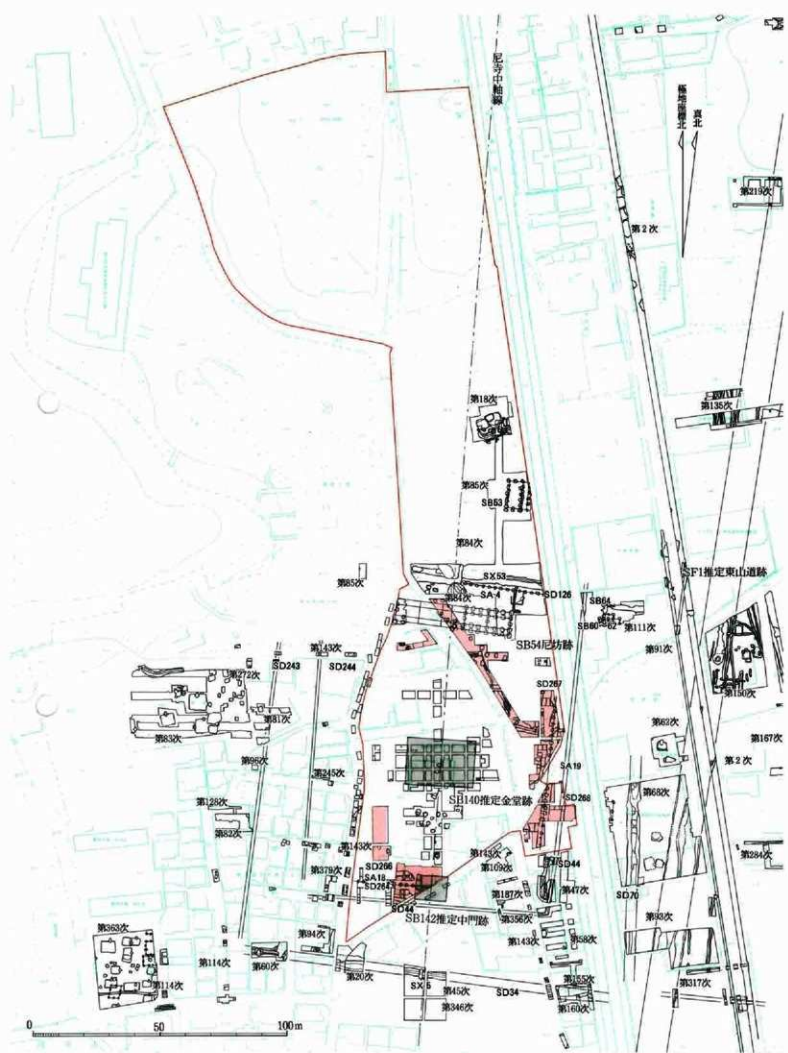
国分寺市文化財調査報告 第42集

武蔵国分尼寺跡Ⅱ

平成5年度発掘調査概報

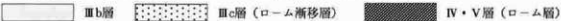
1995

国分寺市教育委員会



第1図 武蔵園分尼寺跡全体図

例 言

1. 本書は東京都国分寺市西元町に所在する史跡武蔵国分寺跡（尼寺地区）史跡環境整備事業に伴う発掘調査（平成4年度から継続事業）の平成5年度概要報告である。発掘調査は文化庁と東京都の補助を受け、国分寺市教育委員会が調査主体となり、国分寺市遺跡調査会が調査を担当した。
2. 調査は武蔵国分寺跡第383次調査として、平成5年5月17日から平成6年3月31日まで（現場における作業は平成5年5月17日から平成6年1月31日まで）、買収地内において、面積1,092.4㎡の範囲について実施した。出土遺物・写真・図面等へは遺跡略称のMKを冠し、「MKⅢ-383-以下台帳番号、登録番号」のように注記しており、全て国分寺市教育委員会が保管している。なお、出土遺物は瓦類を主としてコンテナ229箱である。
3. 調査に至る経過と調査計画、位置・立地と周辺の遺跡、調査のあゆみと現状、順序、調査方法については、『武蔵国分寺跡Ⅰ（平成4年度発掘調査概報）』を参照されたい。
4. 図面中の方位は特記以外は僧寺中軸線を基準とした極地座標北を表示している（詳しくはⅢ-1参照）。
5. 遺構断面図の水糸高は特記以外は全て海拔標高66.0mに統一した。
6. 遺構断面図における地山のスクリーントーンの指示は次のとおりである。

7. 遺構記号は下記のとおりとし、Pを除いて第1次調査より連続番号を与えている。
SA 厨跡・柱列跡 SB 礎石建物跡・掘立柱建物跡 SD 溝跡 SF 道路跡
SK 土坑 SI 住居跡・工房跡 SX 特殊遺構 P 小穴、小柱穴
8. 遺物記号は次のとおりとし、調査回数毎に連続番号を与えている。本書においては実測図と写真図版の下段に表示した。なお、遺物には黄色ポスターカラーで注記してある。PH 土師器 PL 土師質土器
PK 須恵器 KA 鍔瓦 KB 宇瓦 KC 男瓦 KD 女瓦 KH 埴 MA 銭貨
9. 発掘調査から概報作成にいたるまで、文化庁・東京都教育委員会をはじめとする諸機関、諸先生方にご指導ご助言を賜り、また地元住民をはじめ関係各位のご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。
荒井健治・板野晋鏡・上野佳也・江口 桂・佐口節司・須田 勉・須田 誠・園村雅敏・木下正史
高林 均・塚原二郎・西野善勝・早川 泉・松田真一・松田隆夫・松本太郎・山口辰一・山路直充
雪田 孝・領塚正治・和田信行
黒鐘自治会、府中市立武蔵台小学校、国分寺市立第4小学校

10. 平成5年度の調査体制は次のとおりである。

調査主体 東京都国分寺市教育委員会

調査担当 国分寺市遺跡調査会

役員および監事	会 長	星 野 亮 勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
	副 会 長	吉 田 格	国分寺市文化財保護審議会委員
	理 事	永 峯 光 一	東京都文化財保護審議会委員
		坂 浩 秀 一	“
		大 川 清	国土館大学教授
		本 多 良 雄	国分寺市長
		内 野 考 治	国分寺市教育委員会教育委員長
		高 橋 俊 司	国分寺市教育委員会教育長
		星 野 亮 雅	国分寺市社会教育委員会議議長

	藤 間 恭 助	国分寺市文化財保護審議会委員
	本 多 寅 太 郎	“
	松 井 新 一	
	桑 正 博	東京都教育庁生涯学習部文化課副参事
	関 隆 成	国分寺市教育委員会社会教育部長
監 事	梶 戸 漣	国分寺市社会教育委員会副議長
	佐 藤 攻	東京都教育庁生涯学習部文化課埋蔵文化財調整係長

武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会

	委 員 長	吉 田 格	(考古)
	委 員	永 峯 光 一	“
	“	坂 浩 秀 一	“
	“	大 川 清	“
	“	宮 本 教	(古代史)
	“	金 丸 義 一	(建築史)
事務局	事務局長	天 野 稔	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課長
	事務局員	宇 郡 宮 精 一	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課庶務係長
		鈴 木 晃	“ “ 庶務係員
		藤 倉 しのぶ	“ “ “
		松 澤 修	
調査団	団 長	吉 田 格	(簡出)
	主任調査員	有 吉 重 蔵	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課文化財保護係長
	調 査 員	福 田 信 夫	“ 文化財保護係員
		上 村 昌 男	“ “
		上 敷 領 久	“ “
		滝 島 和 子	“ 囃子遺跡調査員
		岩 崎 玲 子	“ “
		木 下 さ お り	
	調査補助	井口正利・小池和彦・荒 順・鈴木靖彦・桂 弘美・飯島敏雄・高田智博・中田一夫・	
	(第383次)	斉藤光司・多田多文治・藤崎 勇・森安敦子・原田靖枝・井上 幸・宮沢高司・	
		山本 克・小山 智	
		川岸満子・東條一三・大下ゆみ・相馬しのぶ・若林雅子・桑名俊子・鈴木雪江・	
		大羽正子・鈴木フミエ・川越裕子・小川輝子・小林幸江	
	実 習 生	新 村 博	(上智大学)

11. 本書の編集・執筆は吉田格団長の監修のもとに、福田信夫が執筆、編集した。

目 次

例 言

I 調査の経過	1
1 前年度の調査	1
2 調査方法	1
3 調査日誌抄	3
II 調査の概要	5
1 中門, 金堂前面・西地区	5
2 講堂北, 尼坊・講堂北東地区	8
3 鐘楼, 中板部区画東辺地区	9
III 出土遺物	12
1 土器類	12
2 瓦塔類	12
3 瓦塔, 銭貨	18
IV まとめ	19

挿 図 目 次

第1図 武蔵国分尼寺跡全体図	
第2図 5年度調査区遺構配置図	
第3図 SB142推定中門断面図	5
第4図 SD44・264・266溝跡, SA18扉跡断面図	6
第5図 SX108掘立柱遺構断面図	8
第6図 SB54尼坊跡 7-3 礎石据付掘方地業断面図	8
第7図 SA19扉跡 柱穴31断面図	10
第8図 SD44・268溝跡断面図	10
第9図 SD267溝跡断面図	11
第10図 SA19, SD44出土土器実測図	13
第11図 SD44・264・267, SX109, SK1389出土土器実測図	14
第12図 SD264・266・267出土土器瓦実測図	15
第13図 SD264・266・267, SX110出土土瓦実測図	16
第14図 SD266出土瓦塔	18
第15図 SX113出土銭貨	18

写真目次

- 写真1 発掘着手時状況（尼坊地区）
写真2 発掘体験教室（中樞部区西東辺地区北側）
写真3 遺跡見学会（講堂北東地区）

図版目次

- | | | |
|------|----------------------------|-----------------------|
| 図版1 | 1 武蔵国分尼寺跡全景 | 2 調査区全景垂直写真 |
| 図版2 | 1 金堂・中門付近全景 | 2 平成4年度金堂・中門付近全景 |
| 図版3 | 1 中門・金堂前面地区調査区全景 | 2 中門地区確認状況全景（西から） |
| | 3 SD266 溝跡（HISK1342土坑）土層断面 | 4 SD44・264溝跡土層断面（東から） |
| | 5 SB142中門地葉下のSA18跡跡 柱穴-1断面 | |
| 図版4 | 1 講堂北・尼坊・講堂北東地区調査区全景 | 2 SBS4尼坊跡発掘部分全景（南から） |
| | 3 SB54尼坊跡 7-3 礎石据付据方地葉断面 | |
| 図版5 | 1 鐘樓・中樞部区西東辺地区北側全景（南から） | 2 中樞部区西東辺地区南側全景 |
| | 3 SA19跡跡 柱穴39南北土層断面 | 4 SD267溝跡東西土層断面（北から） |
| | 5 SD44溝跡内土師器遺出土状況（北から） | |
| 図版6 | 出土土器 | |
| 図版7 | 出土鍍瓦・字瓦 | |
| 図版8 | 出土文字資料集成（1） | |
| 図版9 | 出土文字資料集成（2） | |
| 図版10 | 出土文字資料集成（3） | |

I 調査の経過

1 前年度の調査

尼寺跡調査の第一年度であった平成4年度においては、次の様な成果を得ている。

- ①推定金堂跡については、昭和39年の緊急調査（トレンチ調査）で掘込み地業の北東部及び東南部が確認されていたが、今回新たに南辺と西辺をおさえることができ、その規模を東西38.8m（90.5天平尺、以下同じ）、南北18.3m（62尺）と確定した。版築土は約1.6m遺存していたが、礎石据付痕跡や基壇外縁の化粧などは造成工事により削られ残存していない。
- ②推定金堂心から約49.2m（166尺）南において中門と考えられる掘込み地業を確認した。東西12.5m（42尺）、奥行推定9.6m（32.5尺）。版築土遺存高は約0.4mで、削平により礎石据付痕跡は残存していない。
- ③推定中門中央から柱間8尺の掘立柱礎と溝が西へ延びることを確認した。僧寺と同様に、両者はセットで中廊部を区画する施設と推定される。礎、溝共に2時期ある。
- ④既に定まっている尼坊心と今回確定した推定金堂心及び今回新たに発見した推定中門心はほぼ同一線上になるので、これをもって現段階の尼寺伽藍中軸線とする。僧寺伽藍中軸線に対して北で約4°30′東に偏る。真北に対して西へ2°30′の偏りである。
- ⑤金堂前面地区において特殊な掘立柱遺構を複数確認した。この内、2本一対のものは金堂前面にあって東西に配置され、まさに庭儀法会に伴い立てられた輪平支柱と考えられる。1本柱のもの2基は、中軸線に近い位置で、太い柱で相当に高い重心位置の高い構造物を支えていたものと考えられる。

以上につき詳しくは『武蔵国分尼寺跡Ⅰ（平成4年度発掘調査概報）』を参照されたい。

さて、当初計画で確認を予定していた講堂跡については、本格調査を翌年度に持ち越し、推定地区の一部を深掘りしてみたところ、厚い盛土の下に水付きのローム層があらわれるのみで、講堂跡の手掛かりは得られなかった。当初平成4年度と5年度の2か年計画であったが、この時点で平成6年度までの3か年計画に変更された次第である（最終的には5年度調査の結果を受けて平成7年度までの4か年計画に変更）。

従い、確認調査を含めた事業計画は次の通りに変更された。

平成5年度……整備に先行する発掘調査その2

調査目的は尼寺跡主要遺構（講堂、中門—再調査、鐘楼、経蔵、中廊部区画東辺区画拵などの確認

平成6年度……整備に先行する発掘調査その3

現況測量・基本測量

調査目的は尼寺跡主要遺構（寺域及び中廊部区画北辺）並びに伝律宗寺跡の確認

平成7年度……実施設計・整備工事その1（北方地区）

平成8年度……実施設計・整備工事その2（金堂・講堂地区）

2 調査方法

調査基準線は従来どおり、僧寺伽藍中軸線に合わせた極地座標系によっており、尼寺区域はその第三象限にあたる。極地座標原点は国家座標のIX系 X = 34,446.019, Y = 32,449.085 で、極地座標北方向角は353°37′47″を示す。発掘区の呼称など詳しくは、『武蔵国分尼寺跡Ⅰ』を参照されたい。

調査区の設定

今年度調査の目的に従い、中門地区、金堂前面地区、金堂西地区、講堂北地区、尼坊・講堂北東地区、鐘楼地

区、中樞部区画東辺北側地区、中樞部区画東辺南側地区の8地区を各々設定した。

中門地区は再調査で、4年度で確認されたSB142推定中門跡の堀込み地菓下の柱穴状遺構の確認とSK1342瓦溜の調査を予定した。

金堂前面地区は、中軸線の西側前面の状況を確認するために、南北に長い調査区を設定した。

金堂西地区は、4年度で確認されたSB140推定金堂堀込み地菓を切るSX107不明遺構の西側への延びを確認するために設定した。

続いて、講堂については、昨年深掘りを行った推定地地区（金堂跡北側の一面）では盛土が厚いなど調査が容易でないことが十分予測され、安全対策の点を考慮すると同地点では調査区を限定する必要がある。そこで、周辺部から押さえていく方針をとった。講堂北地区では、尼坊寄りに位置すれば、講堂の北西部を確認出来るはずであるし、尼坊・講堂北東地区では餘接地区にかけて道路に沿って長大なトレンチを設定し、北東部を確認しようとした。よほど金堂寄りに存するか、小規模でなければ確認できるものと期待した。尼坊については、昭和39年の調査で一部確認した中央室付近の再調査である。

鐘樓は僧寺と同じく、金堂と講堂の中間の東側で尼坊の東妻に側柱が中央を揃える位置とみて、道路に沿ったトレンチを設定した。

中樞部東辺地区は、既検出のSD44溝跡東辺の内側に崩跡が平行するものとみて、道路を挟んで南北に調査区を設定した。

現況と層序

今年度新たに調査を行う尼坊、鐘樓、中樞部区画東辺地区は公有後整地され、市民に開放されている。講堂の北側から尼坊にかけては整地以前の造成により大きくローム層まで削平されている。このため、尼坊の礎石は残らず、掘付掘方の下半を残すのみである。対して、南に行くに従い、地層の残りが良くなり、南端では標準土層が良く観察される。標準土層は、Ⅰ層表土がa造成土①（ローム、ガラ）、b造成土②（ローム混じり暗褐色土）、Ⅱ層黒褐色土、Ⅲ層暗茶褐色土、Ⅳ層黄褐色土ソフトローム、Ⅴ層黄褐色土ハードロームである。現況と層序について詳しくは『武蔵国分尼寺跡1』を参照されたい。

3 調査日誌抄

- 3月2日 国分寺市道跡調査会役員会にて5年度尼寺跡調査事業受託案承認
- 4月15日 国分寺市報にて発掘再開のお知らせと4年度の調査成果を速報。
- 4月16日 地元黒鐘自治会(会長早瀬和宏氏)に協力依頼。史跡地内と周辺居住者宅を訪問し協力依頼。調査区周辺に広報板設置。周辺道路を通学路とする国分寺市立第4小と府中市立武蔵台小を訪問し各校長に協力依頼。
- 4月20日 調査区内の樹木を移植
- 5月17日 国分寺市と国分寺市道跡調査会において調査委託契約締結。本日より調査開始
- 5月19日 調査対象地区に安全柵設置
- 5月25日 方眼測量杭設置(委託)
- 5月20日 中門地区より人力により表土除却開始



写真1 発掘着手時状況(尼坊地区)

- 6月1日 ハウス・トイレ搬入(リース)。中門地区のSK1342瓦溜りを再発掘開始。人力で表土除却を開始した講堂北地区で、柱穴(SX108)を確認。講堂掘込み地業は無い。
- 6月2日 梅雨入り
- 6月15日 SB142推定中門掘込み地業に東西トレンチ。昨年発見の1個の落ち込み以外には無い。本日より4日間他地区の表土除却を重機を借上げて実施。
- 7月5日 大雨
- 7月9日 尼坊の北側は大きく削平(中世か)されているが、かろうじて北側柱2個(6-5,7-5)のみが掘方底面を残す。8-2も初出である。

- 7月22日 中樞部区画東辺北側の確認状況写真撮影。内側溝SD267はSA19堀のNo33~36の間が途切れ、その位置より東門(棟門程度)が想定される。
- 7月26日 上智大学学芸員実習新村博氏発掘に参加(8月3日まで)。
- 7月27日 このころ梅雨明け(特定できず)
- 8月2日 東辺堀SA19は中門の東No1(未検出)より道路上のNo14(143次)を経て、No15を隅柱とし、中樞部区画東辺南側地区では、No23~32、同北側地区では、No37~47をあらわしているものと推定される。天候不順、涼しい日続く。
- 8月13~16日 調査会夏休み
- 8月17日 市教委主催「夏休み発掘体験教室」実施。



写真2 発掘体験教室(中樞部区画東辺地区北側)

- 8月27日 台風直撃
- 9月9日 再び台風が秋雨前線を刺激し大雨となる。8~9月の長雨で作業量半減
- 9月11日 もとまち公民館主催で発掘体験教室実施
- 9月24日 講堂北東トレンチ端にて落ち込み(SK1406)かかる。講堂に関連するものとも思われるが不明。
- 10月1日 鐘楼地区から東辺堀北側地区にかけては中世以降と思われる広範囲の土地改変により地山が見えないので、トレンチでさぐっていくこととする。
- 11月10日 講堂北東地区SX109は講堂北のSX108と似て白色粘土が多く入る方形の柱穴状遺構で、

両者が対峙した位置にあり、輻平支柱の可能性あり。東へトレンチを延ばしたところ、3.5m間隔で類似したSX111とSX112が並ぶ。さらにSA19東辺掘寄りの東延長方向を掘ったが、中規模の掘立柱建物跡（SB151）があって、そこまで延びていないことが判明。これ以上の追及は6年度とする。

11月19日 SBI42推定中門掘込み地業下で昨年発見の1個の落ち込みは榊柱穴と確定。SA18の1-Na1とする。柱抜き後、地業を行っている。以後、先行する中門遺構を探るも、痕跡みられない。

11月23日 遺跡見学会、310名参加。



写真3 遺跡見学会（講堂北東地区）

11月25日 鐘樓地区トレンチ北端にて火葬墓確認。焼骨粉末、炭化材、焼土とともに踏びてつい

てしまった5枚の銭貨が出土。上側の1点は「至和元宝」（初鑄1054年）。

11月29日 調査研究指導委員会

12月7日 中樞部区画東辺北側で、内側溝SD267堆積土を天井部とする地下式横穴が開口。中は暗く全体形不詳（SX114）。

12月13日 東辺榊の各柱穴を検討した結果、SA18南辺榊と異なり、建替えが無く、抜いて終りとなっているものとみる。

12月16日 気球による空中写真撮影（委託）実施。調査は1月末まで延長することとした。

以降、平面実測と部分断割りを行う。

12月20日 中門地区から遺構内への砂埋め開始。

12月23日 中門地区、金堂前面・西地区、講堂北地区機械による発生土埋め戻し。

12月27日 越年のため、片付け

1月6日 東辺南側地区全体写真。SA19榊Na40柱穴に建替え痕跡が認められたので、他を再検討したが、やはり抜いて終りである。

1月24日 遺構内への砂埋め戻し開始。

1月27日 東辺南側において、SD44溝跡の北延長とSK1402土坑の南延長にトレンチ。

1月31日 残る地区の埋め戻し、原状復旧を終え、発掘調査完了。

II 調査の概要

平成5年度の調査は総面積1092.4㎡を実施した。

当初の目的内、講堂及び経蔵推定地の調査には至らず、鐘樓跡ともども確認できなかった。が、他地区においては幾つかの成果を得ることができた。再発掘した中門地区においては推定中門の建替えが判明したこと、講堂推定地の北西と北東においては輻竿支柱と考えられる柱穴が並ぶことから講堂がそれらの南に位置するものと推測できること、中樞地区西東辺においては、同区画施設が南辺同様柱間2.4mの掘立柱脚と内外の溝で構成され、推定金堂東方にて内側の溝が途切れることから棟門程度の東門が想定されること、そして鐘樓推定地から東辺区画にかけての地区においては大きく土地の改変を受け、中世火葬墓などが営まれていること、等々新たに確認されたことが多い。

以下、中門地区（調査面積189.9㎡）、金堂前面地区（同122.9㎡）、金堂西地区（同17.5㎡）、講堂北地区（同40.3㎡）、尼坊・講堂北東地区（同217.9㎡、講堂東部分を含む）、鐘樓地区（同99.4㎡、金堂北東部分を含む）、中樞地区西東辺北側地区（同202.6㎡）、中樞地区西東辺南側地区（同201.9㎡）の8地区を、便宜上①中門、金堂前面・西地区、②講堂北、尼坊・講堂北東地区、③鐘樓、中樞地区西東辺地区の3節にわけ説明する。

1 中門、金堂前面・西地区

中門地区においては、SB142推定中門跡とSK1342瓦溜の再発掘とSD44・264溝跡についてもあわせて調査した。SB142の想定西妻柱の位置で掘込み基壇下で昨年確認された柱穴状遺構は、SA18跡柱穴と確定し、No-1とした。SK1342瓦溜は西トレンチで確認されているSD266溝跡の東端と判明した。このほか、SB142の基壇より新しい小穴5個（P-125～129）と北縁にそった小穴2個（P-135・136）とSD266・264・44付近に小穴10個が確認された。

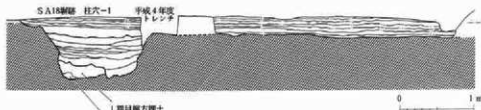
金堂前面地区においては、SK1376・1377土坑と小穴51個がまとめて確認された。

金堂西地区においては、SX105・106不明落ち込みとSX105底面に小穴4個が確認された。

SB142 推定中門跡掘込み地業の再発掘

4年度調査区より掘げて南側道路際まであらわした。あらためて礎石据付痕跡を探したが、確認できなかった。やはり、耕作や造成工事により滅失してしまったものと考えられる。

小穴は地業土を掘り込んでおり、P-126が柱穴である以外、性格不明である。堆積土はいずれも地業土のこねたものである。北縁にそった小穴2個（P-135・136）は昨年確認されたP-4・6・7と並んでおり、P-7・135・136にはSA18跡2期目の掘方埋土や柱抜き取り痕跡並びにSB142推定中門掘込み地業土やSA20柱列跡（足場穴）P-8にも入る白色粘土粒が共通してみられることから、同時期で、ほぼ北縁に沿って不規則な間隔をとることから、掘込み基壇地上部積み上げ土の崩落防止用の枠板を固定する小柱跡（堰板添柱）の可能性が考えられる。



第3図 SB142 推定中門断面図

基壇下検出のSA18榑跡柱穴№-1は南北1.7m以上、東西1.5mの方形掘方で、深さは掘込み地業底面から0.6mである。柱抜き穴が掘方上部より大きく凹部となっており、しかも中央部は掘方底面より0.3mほど深い。この部分に柱が位置していたものと考えられ、これとSA18柱穴№1との間隔は約2.4mで、柱穴№1～10の柱間と同じである。1期目の掘方埋土は断削り部分の西端に僅かに残るのみであったが、ロームブロックを含む黒褐色土で、柱穴№1～10の1期目掘方埋土と同じであった。抜き取り穴部はやや粗いながらも版築をしている。

榑の東延長方向にさらに断削りトレンチを延ばしたが遺構は確認されなかった。

このトレンチによってSB142推定中門掘込み地業の状況が把握された。その底面は平坦でなく、周辺部が浅く、中央が深い。とりわけSA18榑跡柱穴№-1の西側周縁部分が最も浅く、中央との比高差は15cmもある。全体の地業土、特に下部に白色粘土粒が僅かに混入していることが再確認された。

以上のことから、SB142掘込み地業（推定中門跡）は、SA18榑跡2期目に伴うもので、1期目の柱穴№-1の柱抜き取り後、継続した作業で掘込み地業を施し、SB142推定中門を築造し、榑を建替えたことが判明したが、榑1期目に伴う間口の狭いと考えられる門遺構については、痕跡を確認できなかった。榑柱穴の在り方からみて、掘立柱建物であれば、掘方基部が遺存するであろうから、僧寺中門と同じ坪地業で浅い掘付掘方であったか、2期目同様の掘込み地業で浅いものであったかあるいは掘込み部が無いのか、のいずれかと考えられる。

SD266 溝跡（HSK1342瓦溜）

SA18榑跡の北側に東西7m以上、南北3.5mの落ち込みがあり、多量の瓦が集中していることから、瓦溜とみていたこの部分は、1回の掘り直しがある東西溝で、推定中門西縁から西21mの南北トレンチで昨年確認されているSD266溝跡の東端であることが判明した。南の榑側が古く（A期）、北側が新しい（B期）。

A期溝は、上面幅2.4m、底面幅1.2m、深さ確認面から0.8mで、底面はほぼ平坦である。壁の立ち上りは約50°～60°とゆるやかであるが、東端壁のみは垂直近くになっている。底面及び壁は不連続で、東西3mほどを1単位として土坑が連続する形態である。この特徴はB期においても又SA18榑南側のSD264溝・A・B期においても共通して認められる。ただし、A期溝上面の南側上端ラインは、SA18榑とほぼ併行し直線的である。A期の東端はSB142推定中門掘込み地業西縁より西へ1mで、SA18柱穴№1の中央付近にあたる。溝覆土はローム粒、ロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とし、白色粘土粒が全体に顕著である。又、木炭粒が少量入るのも特徴である。ただし、A期では全体にみられるが、B期では上層のみである。南のSA18榑側よりの一方的流入状況を呈しており、短期間に人為的に埋め戻した可能性が高い。

北側のB期溝は、A期溝埋没後に掘り込まれたもので、A期同様連続する土坑状を呈し、東端はA期より1mほど西側で終わる。上面幅3.1m、底面幅1.7m、深さ確認面から1.2mで、底面はほぼ平坦である。南壁の立ち上がりは約70°とやや急であるが、上部は10°～20°とゆるやかに大きく開口する。対して、北壁は60°～70°の立ち上がりから上部はオーバーハンドしており、地山土が大きな塊で崩落している。東端壁はA期と異なりきわめてゆるやかとなっている。底面は中央部分が幅0.5～0.9mの硬化面となっており、このため構築時の掘方は約0.1～0.2mほど深い。ただし、この硬化面と構築時の掘込みは西壁寄りでは不明瞭となっており、昨年の西方トレンチでも確認されなかったので、部分的なものかもしれない。覆土はA期と似ている。A期同様に短期間に埋め戻し



第4図 SD44・264・266溝跡、SA18榑跡断面図

た可能性が高いが、A期と異なり両側からの流入状況である。最上層の南半はA期上部にまで及び、瓦が多い。その幅2.5～3m、深さ0.2～0.4mほどで、東端近くより始まり、西ほど深くなる。ただし、昨年の方方トレンチでは明瞭でなかったで、部分的なものかもしれない。

SD264 溝跡

東端部をSD266溝跡とあわせて掘り上げた。昨年SA18脚跡No.5とNo.10柱穴の南側のトレンチで確認した所見とほぼ同じである。2時期あり、SA18脚寄りが古く（A期）、南側が新しい（B期）。両期とも土坑が連続する形態を特徴とする。上面幅は合わせて3.4m、底面幅はA期が1.2m、B期が1.1～1.3m、深さは確認面よりA期が0.9～1.25m、B期が1.15～1.25m。底面は両期とも平坦でない。壁の立ち上がりは70°～80°といずれも急であるが、とりわけB期北壁がもっとも急で、垂直に近い部分がある。覆土はSD266溝と共通し、ローム粒、ロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とする。白色粘土粒はA期に顕著で、B期においては東先端部にやや多くみられるのみである。A期においては、木炭粒が全体に少量含まれる。B期にはみられない。A期覆土は北のSD18脚側からの一方的流入状況を示しており、短期間に人為的に埋め戻した可能性が高い。B期はA期と異なり両側からの流入状況である。B期東端はA期端を取り囲むように併側に寄っており、この部分が深くなっている。この点がSD266と異なる。

調査区西壁土層断面において、B期北壁をA期埋土を版築した土によっている部分があった。A期溝底面から高さ0.6m、幅（奥行き）0.3mで、6層の版築を行っている。版築土は溝覆土と異なる黒褐色土、茶褐色土で、壁下半部はほぼ垂直であり、丁度断面にかかったピットが堰板添柱の内の1本と考えられる。

また、A期出土の男瓦片とSD266溝B期中層出土片との接合事例が1つある。

SD44 溝跡

調査区南端の道路に沿う造成以前の根切り溝によって大きく削平される。上面幅1.4m、底面幅0.9m、深さは確認面（Ⅲc層中）より0.8m。

金堂前面地区の調査

中軸線の西18～24m、SB140推定金堂掘込み地業南縁の南9～30mに発掘区を設定し、金堂前庭西方地区の様相確認を実施した。

本地区は全体に分層造成もしくはそれ以前の耕作によりIV層（ソフトローム）下部からV層（ハードローム）上部が表土下0.3～0.4mであられる。遺構の大半は南側で確認された。

SK1376 土坑

EE132区所在、東西0.8m、南北1.4m以上、深さ0.25mで、南北に長い長方形土坑である。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。堆積土は締まり強い黒色土で、下層にはロームが入る。

SK1377 土坑

EE・EF130・131区で、SK1376の東南3.5mの至近距離にある。東西1.0m、南北1.7m、深さ0.35mで、南北に長い長方形土坑である。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。堆積土は締まり強い黒色土で、下層にはロームが入る。

この2つの土坑は、形態、堆積土など良く似ており、同じ性格のものと考えられる。武蔵国分寺跡で類例は無く、性格は不明である。覆土は締まり強いが、版築は行われておらず、又柱穴埋土とも全くことになっており、人為的堆積土か自然堆積土かの判断がつかず、従い、開口状態で機能していたものか、充填状態で機能していたものか性格判定資料は得られなかった。

小穴51個の内、柱穴と判断できたのはSK1376土坑の西2mのP-149 1個のみで、他の性格は不明である。ただし、集中的に分布しており、あるいはSK1376・1377土坑とも関連して何らかの機能を有していたものとも考えられる。

金堂西地区の調査

SB140推定金堂掘込み地業を切るSX107不明落ち込みの西延長を探るべく、小トレンチを設定した。付近の表土(盛土)が1.2mほどと厚いので、ト字形に深掘りした。北側にSX105, 南側にSX106の不明落ち込みを確認した。SX105は東西3m以上, 南北4m以上で、底面は平坦で西と南のゆるやかな壁の立ち上がりを見ると、方形を呈する。堆積土は暗褐色~暗茶褐色をした粘性土で、全体に水の影響を受けている。瓦小片が下層よりやや多く出土。SX106はSX105と同位置にて重複しており、東西3m以上, 南北5.5m以上の東西溝状で、北側が浅く、南側に最深部底面を残す。底面深度はSX105に同じ。堆積土は、粘性のある黒褐色土である。

SX105とSX106の全体形は不明であるが、堆積土はSX107に似ており、SX105の平坦な底面はSX107下層の、SX106の溝状部分は同上層と対比することが可能である。この不明落ち込みはSB140推定金堂の北東部から本地区まで相当広範囲に及ぶが、西側道路下にまで延びるか否か不明である。

2 講堂北, 尼坊・講堂北東地区

講堂北地区と北東地区のトレンチにより講堂跡の検出を目指したが、直接的遺構を確認出来なかった。この地区で確実に奈良・平安期の遺構とできるのは、SB54尼坊跡の他に、SX108・109・111・112掘立柱遺構, SK1389・1406土坑である。SB54尼坊跡礎石据付掘方を切るSK1407・1409・1425土坑やSK1386~1390・1408・1410土坑などは中世以降の所産と考えられ、同種の土坑が平成6年度の鏡稜地区調査で多量に確認されているので、詳しくは次回に報告する。その他、SK1388・1390・1406・1408・1410・1426土坑と小穴54個を確認している。

遺構の残は概して悪く、講堂北地区では近年の造成工事によりハードルームまで削られ、擾乱坑が重なっており、尼坊・講堂北東地区では中近世の遺構と重複している。

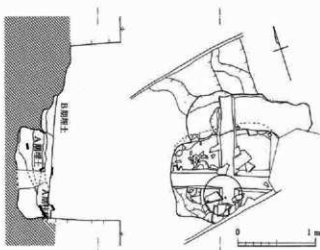
SX108 掘立柱遺構

SB54尼坊の南約10.5mで、中軸線の西へ約16mに位置する。東西1.4m, 南北1mの方形掘方で、深き古期0.6m以上, 北側新时期が0.2m以上である。古期では径0.5mの柱痕跡もしくは抜き取り痕跡(状態悪く判断つかない)が認められた。この痕跡内と古期, 新时期の埋土内から瓦片が多く出土した。又、白色粘土粒や塊が全体に含まれるのが特徴的である。古期掘方の北側壁はややオーバーハングしている。

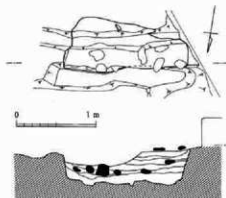
SB54 尼坊跡

昭和39年と54年の調査によって、坪掘り地業の痕跡により柱配列が確認されている。

桁行2間梁行15間の身舎に南北両面附付きの礎石立建物で、3間おきに中央の掘方があるので、5室構成となる。今回はほぼ中央部分を斜めに横断したトレンチにより、既検出の7-3(西から7列目, 南から3列目)を示す、以下建物柱位置表示はこの例による)、9-1, 9-2,



第5図 SX108掘立柱遺構断面図



第6図 SB54尼坊跡7-3 礎石据付掘方断面図

10-1の4個の他、攪乱や中世遺構とからむ6-5, 7-5, 8-2の3個を新たに確認した。

掘方は一辺1.3~1.7mの方形で、V層（ハードルーム）を少なくとも0.6mは掘込み、底面より5~15cm大の円礫を混入させながら版築層（5~15cmを1単位とする）を重ねている。掘方の上部を削平され、礎石は1個も残存せず、礎石抜き取り穴や建替え痕跡、足場穴などの確認も従来と同じく出来なかった。また軒廊跡についても調査区でその存否を確かめることは出来なかった。

よって既往の平面図に重ね合わせて検討した結果、柱間はおおよその数字となるが、間口が44.5~44.7m（150尺）で1間3m弱（10尺）等間、奥行きが9m（30尺）で身舎2.4m（8尺）等間、廂各2.1m（7尺）と計測することが出来た。

SX109・111・112 掘立柱遺構

講堂北で確認したSX108掘立柱遺構と似た平面長方形の掘方で、東西1.2~1.5m、南北1.41~1.7mを測る。SB54尼坊の南約10mで、中軸線の東へ約15~22mに位置する。

当初SX109の全体形把握のための拡張トレンチをさらに東へ延ばしたところ、SX111・112が確認され、3本が尼坊と平行して東西に並ぶように在ることが判明したが、さらに東へつながることも予想されるので、今年度調査は平面確認のみにとどめた。3本共、北側に白色粘土が多く含む柱抜き取り痕跡が大きく認められ、共通点が多い。柱間は3.5m前後である。

SX109と中軸線を挟んで対称の西側にはSX108があり、SX108の西側にも同種遺構が並んで、丁度講堂推定地の北西と北東に複数の掘立柱遺構が併置されたものと推量される。これら掘立柱遺構は昨年、SB140推定金堂の前面で確認されたSX94~103掘立柱遺構と同様、榦竿支柱の遺構と考えられる。但し、個々の掘方が独立した1本柱（A類）であるか、2本1対の支柱（D類）であるかは結論が得られなかった。

なお、SK1389土坑はSX108の西3mにあり、形態、規模や北側壁がオーバーハングする点が類似するものの、上部が攪乱されSX109・111・112のように白色粘土を多く含む柱抜き取り痕跡がみられないことや間隔が若干狭いことなどから、関連については保留としておく。

SB151 掘立柱建物跡

SX109・111・112 掘立柱遺構の西への延長を確認するために、SA19 東辺寄りトレンチを設定したところ、SB151掘立柱建物跡を検出した。一辺0.6~0.8mの小規模掘方3個の北西隅部分で、建替えは無く、SD267溝跡より古い。

3 鐘楼、中枢部区画東辺地区

鐘楼地区の調査

SB140推定金堂と講堂推定地の中間東側付近に鐘楼があるものとみて、道路に沿って北西から南東にかかる斜めのトレンチを設定し、鐘楼地区とした。講堂北東地区と同様、中世以降の所産と考えられる遺構群によって大きく削平され、奈良・平安時代の遺構は無い。削平はV層（ハードルーム）に及び、残存最高地点で標高65.4mほどでSB54尼坊跡7-3掘付掘方の底面高とはほぼ同じであるから、調査区内に鐘楼の礎石掘付掘方があったとしても残る可能性は薄いものと思われる。

中近世の遺構としては、SX113・115火葬墓、SK1411土坑、SX110a,b,c溝状不明落ち込み、小穴19個が検出された。SX113・114火葬墓は土坑内に焼土面があり、骨片、骨粉、焼土粒、木炭粒が底面付近に多く認められる。SX113内からは底面に薄く堆積する木炭層の上に骨片、骨粉と共に銭貨が付着して出土した（第15図）。開元通宝（3）、至和元宝（1）、熙寧元宝（4）、元祐通宝（2）、銭種不明（5）の5枚である。土坑は長方形プランと思われ、南北0.9m以上、東西0.4m以上、深さ0.2m以上である。

SX110はa→b→cと変遷する溝状落ち込みで、SA19をcが切り、SD267をa、b、cが切る。a、bの広が

りは確かめられなかったが、cは調査区に沿ってやや開いたL形に延びる。aの下層の黒褐色粘質土中には多量の瓦片が出土する。bの堆積土はロームブロックが多く、cの堆積土は黒色味が弱い。

本地区については、鐘樓跡の探索のため来年度において広範囲に拡張して調査する予定であるので、詳しくはまとめて報告する。

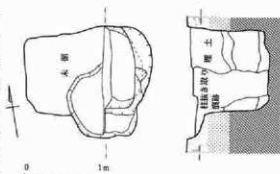
中枢部西東辺地区の調査

SB142推定中門跡より派生する中枢部を区画する掘立柱脚跡と溝跡の東辺を可能なかぎり長く確認すべくトレンチを設定した。武蔵野線のガードへ通じる市道を挟んで北側地区と南側地区に大きく別れる。

確認された遺構はSA19堀跡(掘方21個)、SD44・267(A・B期)、268(A・B期)溝跡、SK1391・1402・1403・1405土坑、SX114地下式植穴と小穴46個である。

SA19 堀跡

SB142推定中門の東へ延びて、北へ折れ曲がり、尼寺中枢部を区画する。南面部分は未検出である。柱間はSA18と同じで2.4mであるが、柱穴23から柱穴32までは乱れていて(掘方の東西位置もこの部分で乱れている)、柱位置の推定できる柱穴25から32までの7間をみると、順におよそ3.0m,2.4m,2.5m,2.2m,2.4m,2.4m,2.5mなどとなっている。南東隅の柱穴15から柱穴32までの間約42.8mを17間とると柱間2.5m強等間、18間とると2.4m弱等間となり、両方の可能性が考えられる。ここでは、2.5m強等間として柱穴15-22を復元しておいた。



第7図 SA19堀跡 柱穴31断面図

SA18と異なるのは、建替えが無いことで、1度の柱抜き取りをもって終わる。抜き取りの方向は同じで外側である。掘方埋土は黒色土と黄褐色ローム土の互層でSA18堀跡1期目の埋土と同じであり、掘方の特徴などからみて設置時期を同じくするものとする。抜き穴内には白色粘土が多く混入している掘方があり、SA18堀跡1期目の抜き取り穴(即ち2期目の掘方埋土)もしくは2期目の抜き取り穴混入土と似ている。いずれに対応するかは、遺構の上からは結論出来ない。なお、柱穴29の平面観察では1度の建替えが看取されるが、中央部分を水道管に破壊され確実性に乏しい。

掘方は短辺0.8~1.2m、長辺1.0~1.4m、深さがIV層(ソフトローム)上面より0.5~0.8mの長方形の箱形で、東西方向に長い。SA18南辺堀と同規模である。

なお、SA19堀の方向角は僧寺軸線に対して6°30'東偏し、南辺SA18(東偏95°15')と北辺SA4(東偏97°25')の中間値を示す。

SD44 溝跡

南側調査区でSA19堀跡の東約7mの位置する南北溝で、本調査区の南側と北方(SD126)で既検出である。本調査区の南20mほど南で西へ折れ曲がり、昨年確認したSB142推定中門の南側へつながる。上面幅1.5m、底面幅0.9m、深さは確認面(Ⅲc層中)より0.7mの中規模溝である。

DT・EA108区の中層上面の南北1.5mほどにわたり、因分寺II期(塔再建期)の土師器大型甕6個体、小型台付甕6個体(内台付の明確なもの2点)などが一括廃棄された状態で出土した。中層以下は自然堆積層とみられ

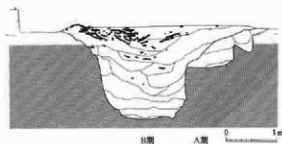


第8図 SD44・268溝跡断面図

るので、本溝は国分寺1期（創建期）に機能していたものと判断される。

SD267・268 溝跡

南辺西側同様、堀の両側に溝が付設される。南面西側のSD266溝跡に対比される内側溝をSD267、同SD264溝跡に対比される外側溝をSD268とし、部分的な断削を行ったところ、形態、規模、堆積土など南面西側と同じであった。両溝共2時期で、堀側が旧く（A期）、外側に掘り直す（B期）。概して両溝共A期が小規模で浅く、B期が規模大きく深い（SD267溝B期が最も規模大きい）。底面は平坦でなく、土坑が連続した形態である。A期は共に壁が部分的オーバーハングする。SD267溝A期が上面



第9図 SD267溝跡断面図

幅1.6~1.9m、底面幅0.5~0.9m、深さ0.5~0.9m、同B期が上面幅1.5~3.9m、底面幅1.1~1.4m、深さ0.8~1.8m、SD268溝跡A期が上面幅1.3~1.6m、底面幅0.9~1.3m、深さ0.5~1.05m、同B期が上面幅1.3~2.8m、底面幅0.6~1.3m、深さ0.7~1.2mである。

両溝共A期は堀側から人為的に埋め戻されており、ロームと白色粘土が多い。B期も共に上層まで両側からの人為的埋め戻しが行われ、ローム多く、白色粘土はやや少ない。SD267B期溝上層より多量の瓦が出土した。この点も南辺西側と同じである。

東門推定地

SD267溝跡がA・B期共、SA19堀跡柱穴33~36付近で途切れる。空白部の南北は約6.5m以上である。外側SD268が同じ様に途切れるか否か調査区外となって不明である。堀柱間がこの付近を境に差があることや丁度この位置がSB140推定金堂跡基礎の中央延長にあたることなどから棟門程度の東門跡の存在が想定される。

なお、SK1403はSD267溝B期が途切れる位置にある円形土坑で、上面径1.8m、底面径1.0m、深さ1.2mあり、東寄りの底面には径0.6m、深さ0.35mの小穴がある。B期溝との重複部分が土層ベルトにかかり、新旧関係を確認できなかったが、土坑上部の堆積土がB期溝下層の埋め込み土に似ていることとB期溝心と若干ずれることから、A期溝に伴うものと考えられる。土坑内の堆積土は中央の大半が底面の小穴まで締まりに欠くローム多い黒褐色土と壁際に僅かに残る締まり強い黒褐色土があり、前者を柱痕跡もしくは抜き取り穴、後者を掘方埋土ととらえ、本土坑を一本の柱穴跡とみることもできる。

Ⅲ 出土遺物

出土遺物は8645点。土器類1300点と瓦類7328点の他に、瓦塔2点、銭貨5点、フイゴ羽口3点、縄文土器片7点がある。ここでは、遺構出土遺物を中心に主なものを紹介するにとどめる。

1 土器類

遺構出土土器類1090点の内訳は、土師器環29点、同壘812点、還元焙焼成須恵器環106点、同蓋24点、同壘他62点、酸化焙焼成須恵器環他27点、土師質土器環9点、灰釉陶器他3点、中近世陶器他18点で、多くは小破片で、図示出来たのは、22個体である。多くは、瓦類と同じく中樞部区画施設機能停止後の溝SD44・264・267上層に堆積したもので、尼寺中樞部区画施設の末期を示す資料ということが出来る。

土師器（第10・11 図）

第10図2～11、第11図1は中樞部区画東辺SD44溝跡上層出土の一括廃棄遺物である。全て壘の破片で、同一地点から出土した717点の資料の内520点が接合し15個体となった。この内11点を図示した。

全ていわゆる武蔵型壘で、第10図2～5・9は小型の壘（台付の可能性あり）、第10図6は小型台付壘、第10図8は同脚部、第10図7・10・11と第11図1は大型壘である。口縁はやや弱いコ字状、胴上半部に最大径を有し、胴下半部がすばまり小さい底部となる器形で、頸部に指頭痕を残して横ナデし、胴上半部は斜めか横のヘラケズリ、胴下半部は縦のヘラケズリを施す。器壁薄く、口縁部で3～6mm、胴下半部では1.5～3mmである。

倒卵形の大型壘のみならず小型台付壘においてもその口縁部形態はく字状からコ字状へと変化する傾向が指摘されている（山口辰一1984「武蔵国府関連遺跡における土器編年試論」「武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅴ」府中市教育委員会発行 所収）。この中でも、よりく字状に近い第10図2・4・5・9などの小型壘や、よりコ字状に近い第10図11などの大型壘などがあり、製作年代に幅があるものと思われるが、一括廃棄資料として国分寺Ⅱ期（塔再建期、9世紀代）の年代が与えられる。

第11図2は小型壘（台付の可能性あり）で中樞部区画南辺のSD264溝跡中層（AもしくはB期）出土、3は台付壘の脚部で、同溝B期下層出土である。2の口縁部は第10図4・9などSD44溝跡出土の小型壘と比べると、よりコ字状へ変化しているで、より後出的といえる。

須恵器（第10・11 図）

第10図1は、SA19柱穴32上層出土の坏で、底部の再調整は無い。第11図4は、SD264溝出土で、体部外面に墨書文字「□（万カ）」と「て」がある。第11図5～7はSD267溝上・中層出土。全て国分寺Ⅲ期（衰退期、10世紀以降）に位置付けられる。6は酸化焙焼成である。7は底部外面に「山田」の墨書文字がある。これで7例目であり、僧尼寺中間地出土の1例の他は全て尼寺寺域周辺出土であることが特筆される。第11図10はSK1389出土の還元焙焼成坏で、底部外面に「三」の墨書文字がある。墨書文字「三」の出土事例は次の2例がある。

○須恵器A（還元焙焼成）坏底部外面（第2次、SI23住居跡、遺物番号PK19）

○須恵器A坏体部外面と底部外面（第111次、SD126溝跡、遺物番号111-8）

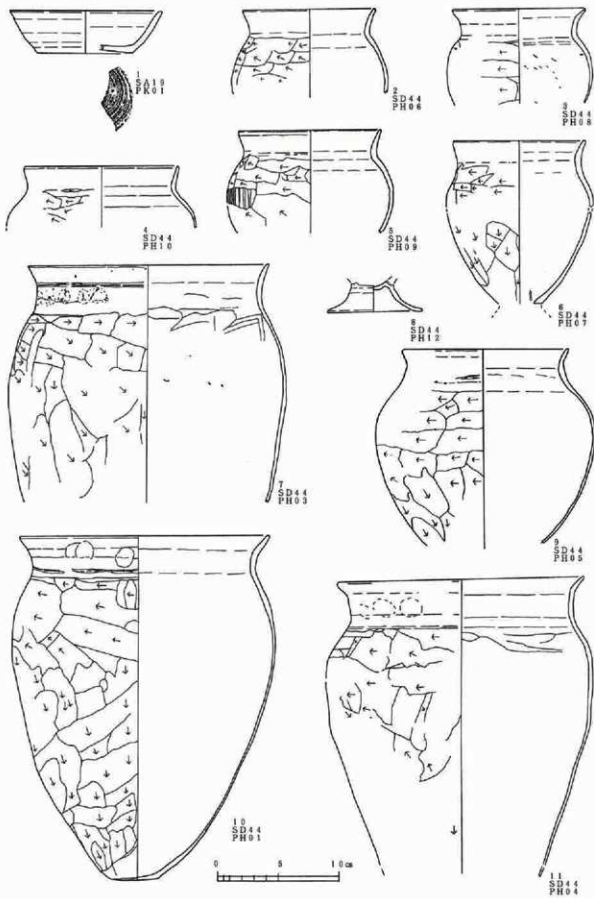
第11図はSX109掘立柱遺構出土の還元焙焼成坏で、底部の再調整は無い。

土師質土器（第11図）

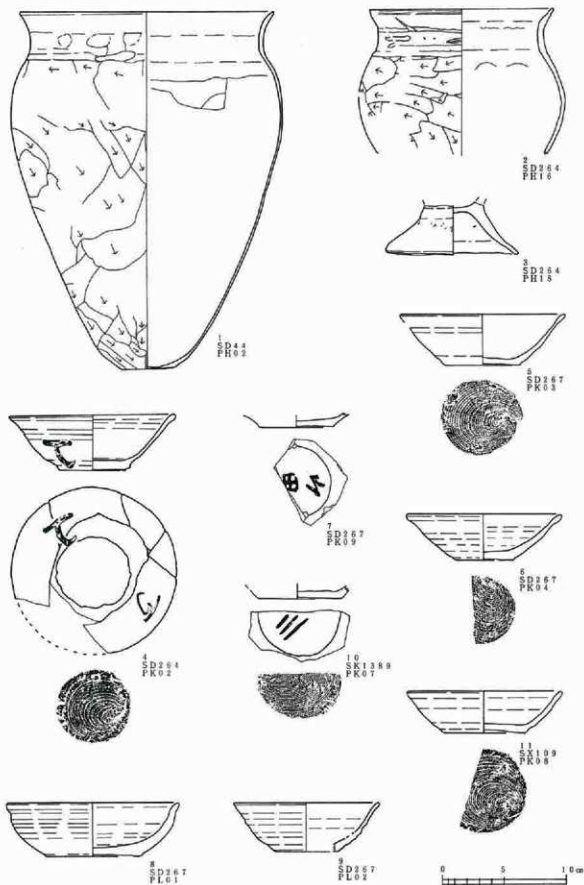
第11図8.9共、SD267溝上層出土で、国分寺Ⅲ期に位置付けられる。

2 瓦 埴 類

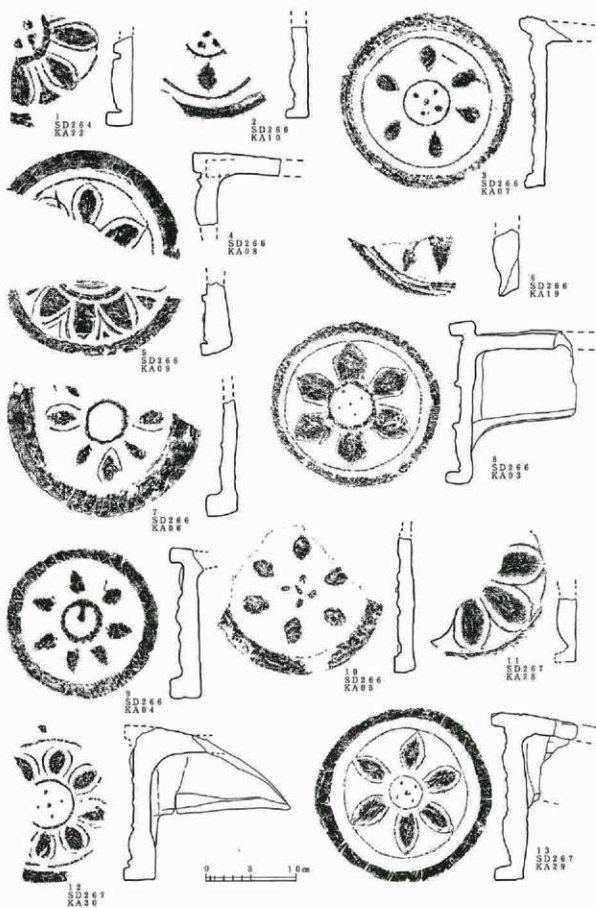
遺構出土瓦埴類5661点の内訳は、甍瓦52点、字瓦19点、男瓦2497点、女瓦2660点、埴瓦3点、埴23点、その他



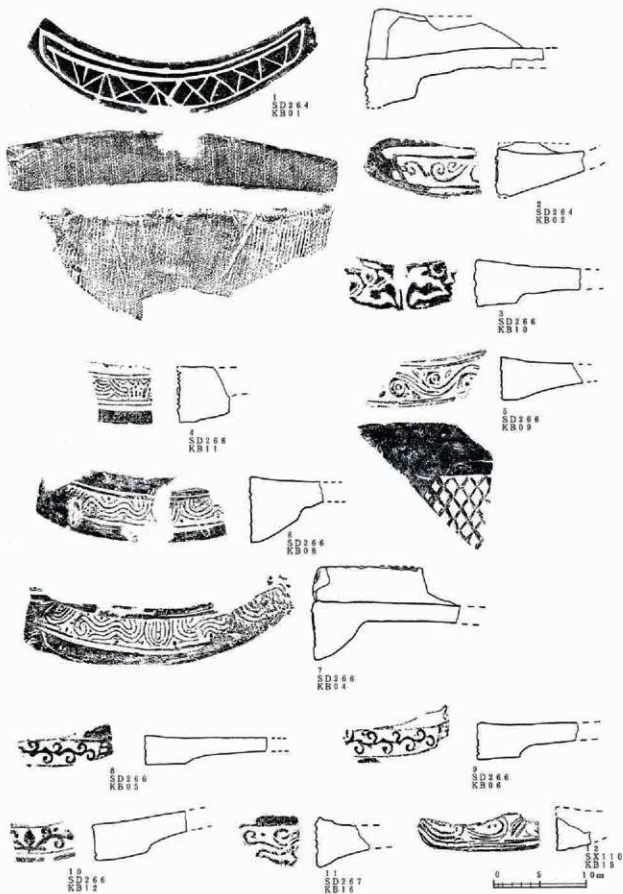
第10图 SA19, SD44 出土土器実測图 (1:3)



第11圖 SD44・264・267, SX106, SK1389 出土土器実測圖 (1:3)



第12图 SD264·266·267 出土铜瓦表测图(1:4)



第13图 SD264·266·267. SX110 出土砖瓦实测图(1:4)

不明小片(407点)となる。遺構別に見ると、SD266溝跡(2182点)、SD267溝跡(2079点)、SX110不明落ち込み(752点)、SD264(316点)などで大半を占める。今回は、鏝・字の文様瓦と文字瓦のみを図示した。

鏝瓦(第12図)

1がSD264溝跡、2~10がSD266溝跡(4がA期、5が不明の他はB期)、11~13がSD267溝跡出土である。全て蓮弁に子葉の無い素弁蓮華文で、蓮弁の数は4葉(7)、6葉(2~4・6・8・10・13)、7葉(5・9)、8葉(1・11・12)である。男瓦部との接合は4のみさしこみ技法(瓦当裏面上部に溝を付け接合)が観察される。8の同范瓦が埼玉県入間市新久喜跡A地点1号跡(IV類)にあり、国分寺II期(塔再建期)に位置付けられる。

宇瓦(第13図)

1・2がSD264溝跡、3~10がSD266溝跡(4がA期、5が不明の他はB期)、11がSD267溝跡、12がSX110不明落ち込み出土である。1はへら書き鋸歯文、2~4・6~10は均正唐草文、5・11・12が偏行唐草文で、1・3・4・6~10が段頸、2・5・11・12が曲線頸である。なお、11には南比企窯跡産の特徴といわれる白色針状物質が顕著に認められる。この内、4の均正唐草文宇瓦は国分寺II期(塔再建期)に位置づけられている(有吉重蔵1986「遺瓦からみた武蔵国分寺」『国分寺市史 上巻』国分寺市発行 所収)。

文字瓦(図版8~10)

人名、郡名、郷名、その他(記号、内容不明など)の文字瓦については遺構外出土のものを含めて612点が得られた。銘記方法別にみると、押印・押型106点、へら書き141点、模骨25点、朱墨書323点、その他指頭によるものなど17点である。この中から内容の明確なものなどを紹介する。

人名文字瓦は、男瓦凹面に「戸主壬生部廣□」(KC48)、同「□良マ花万呂」(KC45、あわせて凸面に「豊」の郡名押印あり)、同「戸主利マ廣嶋」(KC46、あわせて凸面に「豊」の郡名押印あり)、同「□(マカ)乙万呂」(KC49)、同「□(山カ)□」(KC44)、同「□(棕カ)□(橋カ)」(KC47)、同「戸主□」(KC50、あわせて端面にへら書き「廣」あり)、同「□」(KC10)などがある。

郡名文字瓦は、都築郡押印「□(都カ)」(女瓦凸面、KD272)、橘樹郡へら書き「□(橘カ)」(KC07)、荏原郡押印「荏」(男瓦凸面、KC06)、同押型「荏」(女瓦凸面、KD01・02・04・59・64)、豊島郡押印「豊」(男瓦凸面、KC02・09・52)、同へら書き「豊」(男瓦凸面、KC14)、入間郡押印「入瓦」(女瓦凹面、KD98)、埼玉郡押印「埼(逆字)」(女瓦凹面、KD98)、榛沢郡押印「榛」(男瓦凸面、KC13)、那珂郡押印「那」(男瓦凸面、KC05)、秩父郡押印「父」(女瓦凹面、KD65)、同押型「父」(女瓦凸面、KD238)、同へら書き「父」(男瓦凸面、KC02・04)などがある。

郷名文字瓦は、都築郡立野郷へら書き「郡立」(女瓦凸面、KD67)、荏原郡木田郷へら書き「木田」(女瓦凹面、KD120)、豊島郡荒基郷へら書き「□荒」(男瓦凸面、KC51)、埼玉郡大田郷押型「大□(田カ)」(女瓦凸面、KD66)などの他、前出の豊島郡押印(KC52)の広端面に同郡湯嶋郷へら書き「湯嶋」がある。

その他の文字瓦として、模骨「中」(女瓦凹面、KD96)、同「○」(女瓦凹面、KD61)、押印「瓦」(女瓦凹面、KD97)、同「禰」(男瓦凸面、KC15)、同「◎」(男瓦凸面、KC08)、「フ」(男瓦凸面、KC62)、へら書き「大」(女瓦凹面、KD116・121・128)、同「七」(女瓦凹面、KD63)、同「木」(女瓦凹面、KD130)、同「乞(足カ)」(女瓦凹面、KD115)、同「毛」(男瓦凸面、KC16)、同「丸」(男瓦凹面、KC03)、墨書「困」(女瓦側端面、KD216、あわせて模骨「代」と朱墨書「了」あり)、指書き「目(目もしくは日カ)」(女瓦凹面、KD119)などがある。

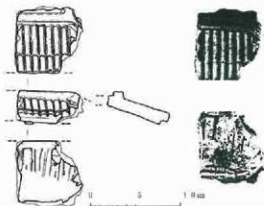
この他に図示出来ななかったが、朱墨書「寺」及び「□(寺カ)」が男瓦凹面に5点、女瓦凹面に32点ある。

なお、遺構内出土の男瓦の内、有段(玉縁式)のものは2点で、他は全て無段(行基式)である。女瓦凸面の叩きは、縄目が2032点、格子目が563点、平行叩きが8点、米印の叩き(桶巻造り)が1点、その他不明など56点の内訳である。

3 瓦塔、銭貨

瓦塔 (第14図)

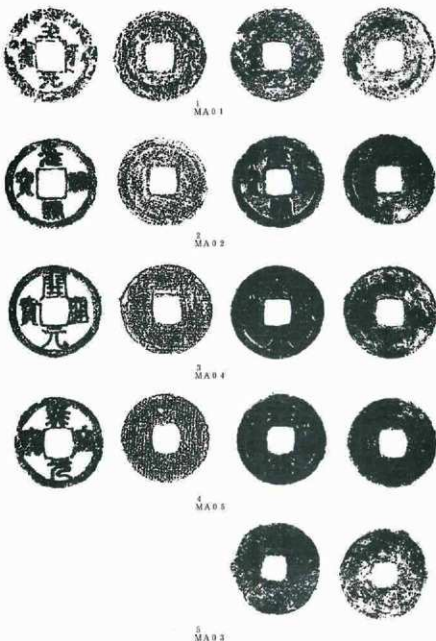
瓦塔もしくは瓦堂屋蓋部の隅部分で、SD266溝跡A期下層出土。赤味の強い土師質。砂粒を多く含む。幅6mmの男瓦部は半載竹管状工具の押し引きで表す。隅棟は頂部が尖る裾幅9mmの隆帯で表す。隅棟を結ぶ方形隆帯の幅は11mmで、頂部平坦。中央平板部分の厚さ9~12mm。裏面には幅9mmの隆帯で垂木を表す。間隔は心々で32mm。他に表土中より同じく屋蓋部隅部分小片1点が出土している。



第14図 SD266 出土瓦塔 (1:4)

銭貨 (第15図)

SX113火葬墓出土で、1→5の順に緑青により固着していたものを分離した。1は至和元寶(北宋、初铸年1054、錢径24.6mm、真書)、2は元祐通寶(北宋、同1086年、同24mm、篆書)、3は開元通寶(唐、同621年、同24.5mm、背上に月文)、4は熙寧元寶(北宋、同1068年、同24mm、篆書)、5は錢種不明(同23.5mm)。



第15図 SX113 出土銭貨 (1:1)

IV ま と め

今年度調査の結果は次のように要約される。

① 中門地区は4年度に引き続き再発掘地であった。4年度に版築を確認し、その規模を東西12.5m、南北9.6mと割り出したSB142推定中門の掘込み地業下において西妻柱にあたる位置にSA18脚跡1期目の柱穴を確認し、SB142推定中門の建替えを明らかにできた。SA18脚跡1期目に伴う中門跡の痕跡は残らないが、間口が10mを越えない規模と考えられる。地業下脚柱穴への版築の状況から、脚の建替えと門の建替えが一連の工程でなされたことが伺える。

② 同じく4年度に確認されたSB142推定中門の北西でSA18脚北側のSK1342瓦溜を完掘したところ、SD266溝跡の東端であることがわかった。SA18脚跡とは並行し、脚に近い方のA期溝から脚に近い方のB期溝へと変遷する。この点と、土坑状に連続する形態、両期の規模、堆積土などがSA18脚南側のSD264 A・B期溝跡と共通することから、脚に伴う施設で、脚の建替えを契機としての変遷があることが判明した。

③ 金堂前面(西側)地区においては、4年度にSB140推定金堂前面で輪竿支柱と考えられる掘立柱遺構を複数検出したので、関連の遺構を探索したが、明確なものは無かった。

④ 講堂については、推定地の北と北東にトレンチを設定したが、確認できなかった。中近世の遺構と重複している上に、近年の造成工事による削平により該期遺構の残りが悪くなっていることや、僧寺創建講堂のように地上積み上げ部のみの基礎である可能性もあることが考えられ、そうした事情が一層発見を難しくしているものとみられる。但し、推定地の北西と北東に、輪竿支柱と考えられる掘立柱遺構が複数並んでいることが推測されるに至り、講堂はこの位置より南にあることがわかった。

⑤ SBS4尼坊跡の調査は今回で3度目であり、新たに3個の礎石掘付掘方を確認した。礎石は全く残っていないので、建物規模は概数で、間口15間44.5~44.7m(3m弱等間)、奥行き4間9m(身舎2間2.4m等間、扉各2.1m)である。また、軒廊跡については調査区でその存否を確認出来なかった。

⑥ 鐘樓推定地の一帯においても、中近世の遺構によりローム層が削平されており、同跡の礎石掘付掘方は検出出来なかった。但し、鐘樓は規模も小さく、位置想定が難しいので、調査区の設定が当を得ていないことも考えられることから、6年度にさらに周囲を広く調査することとした。

⑦ 中樞部西東辺については、以前に発見されているSD44溝跡の内側に掘立柱脚があるものとみて調査区を設定したところ、予測どおりSA19脚と内側溝SD267、外側溝SD268を確認することが出来た。但し、SA19脚に建替えは無く、南面と異なる。又、一部柱間が乱れ、2.2m、2.5m、3.0mなどの部分がある。付属する内外の溝は共に2時期あり、土坑状に連続する形態、両期の規模、堆積土など南面と共通する。

東辺脚の方位は東偏6°30'で、尼坊の方位(東偏6°56')に最も近い。そして金堂心の位置で中軸線から42.44mを測る(方位のずれで、南辺では40.68mとなる)ので、中樞部西の東西規模はその2倍の約84.9mと想定される。

⑧ 東辺内側溝SD267がA・B期共、SA19脚柱穴33~36付近で途切れる。空白部の幅は南北約6.5m以上で、丁度この位置がSB140推定金堂心にあたり、周囲に柱穴が無いことから極門程度の東門跡が想定されるに至った。市道直下のため、6年度に再発掘することとした。

以上であるが、講堂・鐘樓など主要建物の位置や規模、鐘樓地区などの中近世遺構群並びに中樞部西施設の構造と変遷については、来年度の講堂・鐘樓地区、東辺、東門推定地地区などの調査の結果をまけて検討を加え、詳述していきたい。なお、講堂・経蔵推定地の本格的調査を6年度に持越したので、全体調査計画をさらに1年延伸し、整備に伴う尼寺地区の調査は平成7年度まで継続されることになった。



1 武藏国分尼寺跡全景



2 調査区全景整直写真



1. 金堂・中門付近全景



2. 平成4年度金堂・中門付近全景



1. 中門・金堂前面地区調査区全景



2. 中門地区確認状況全景 (西から)



3. S D 266清跡 (旧SK1342土坑) 土層断面



4. S D 44-266清跡土層断面 (東から)



5. S B 142中門地地下のSA18壕跡 柱穴-1断面



1. 講堂北、尼坊・講堂北東地区調査区全景



2. S B54尼坊跡発掘部分全景（南から）



3. S B54尼坊跡 7-3 礎石据付掘方地業断面



1. 雉楼・中枢部区画東辺地区北側全景（南から）



3. SA19跡跡 柱穴39南北土層断面



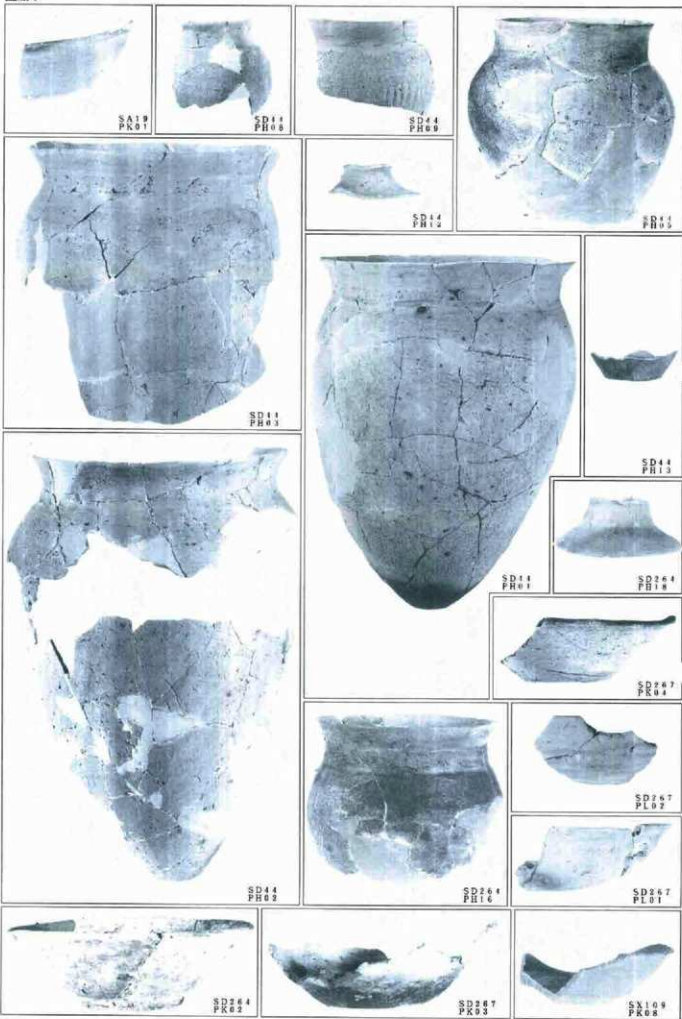
4. SD267跡跡東西土層断面（北から）



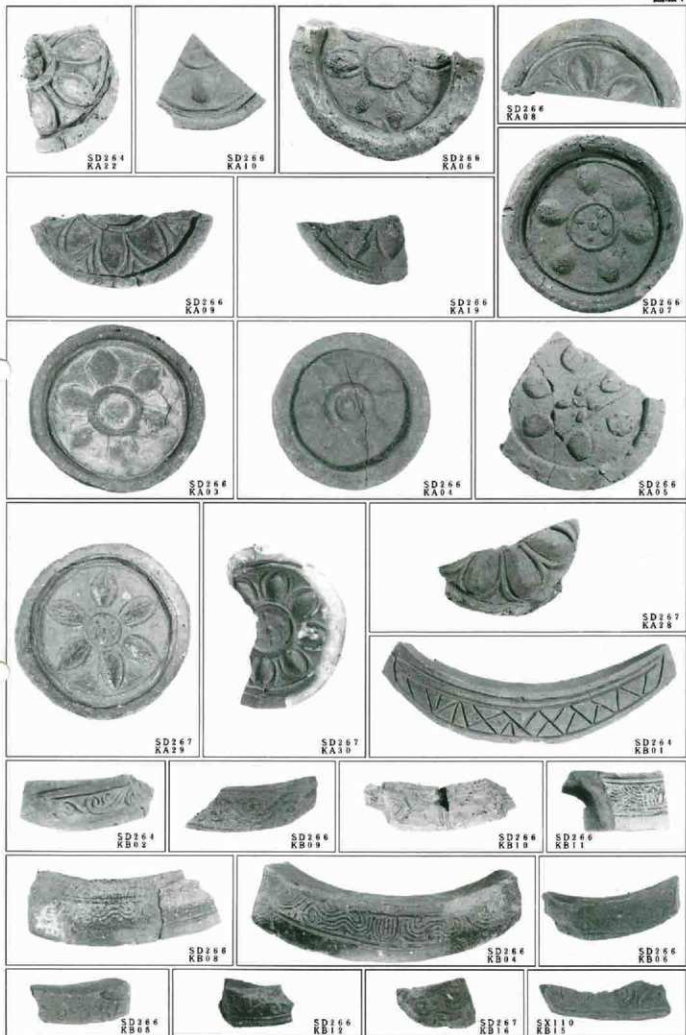
2. 中枢部区画東辺地区南側全景

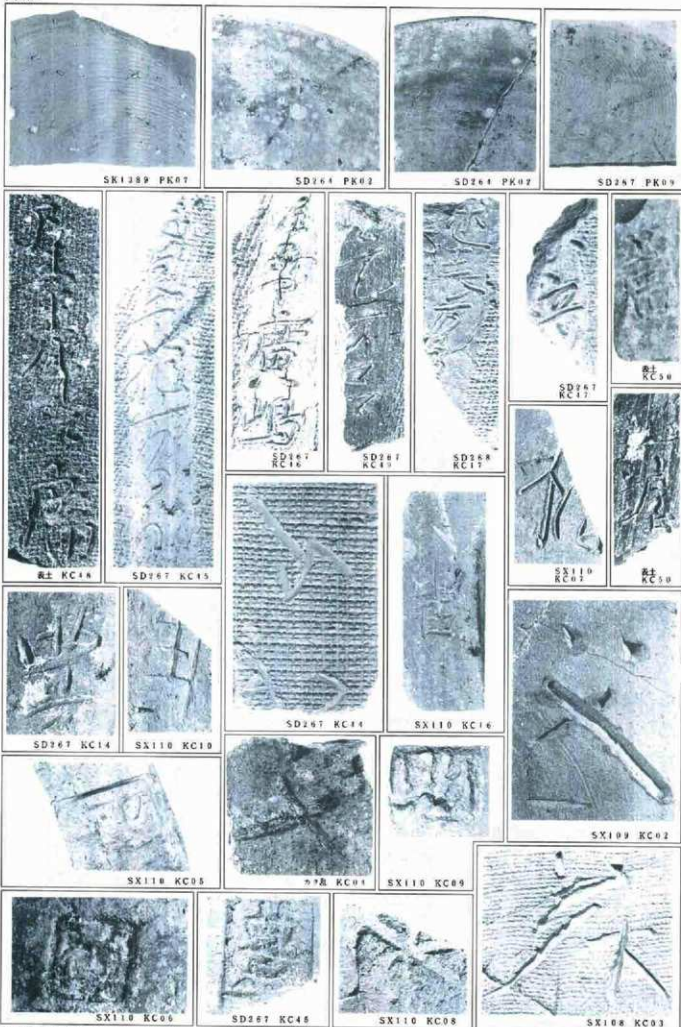


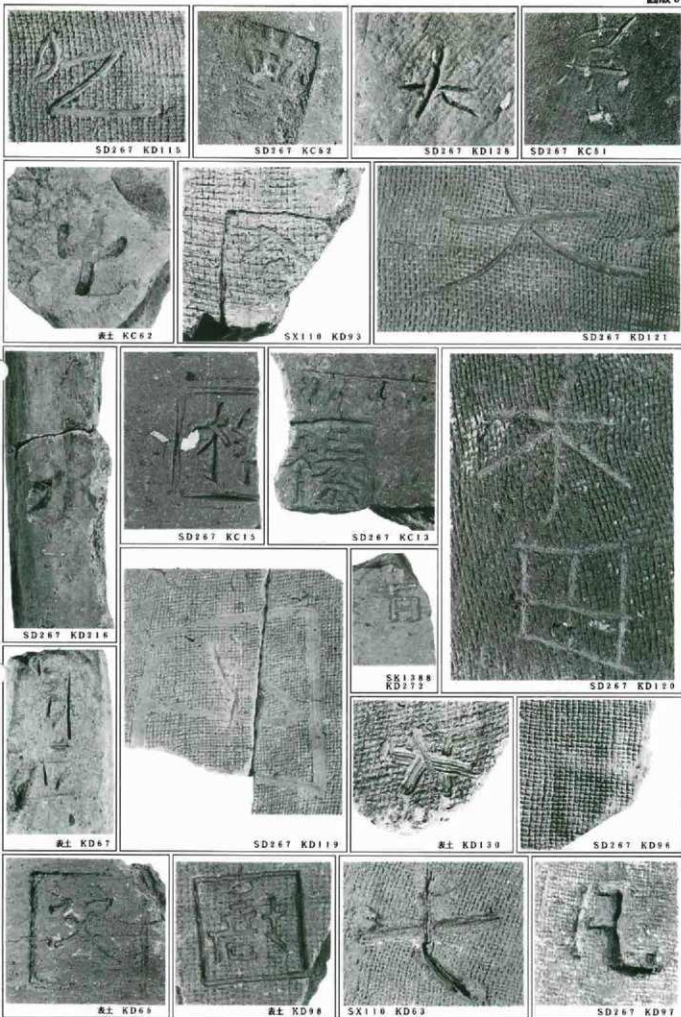
5. SD44跡跡内土師器片出土状況（北から）

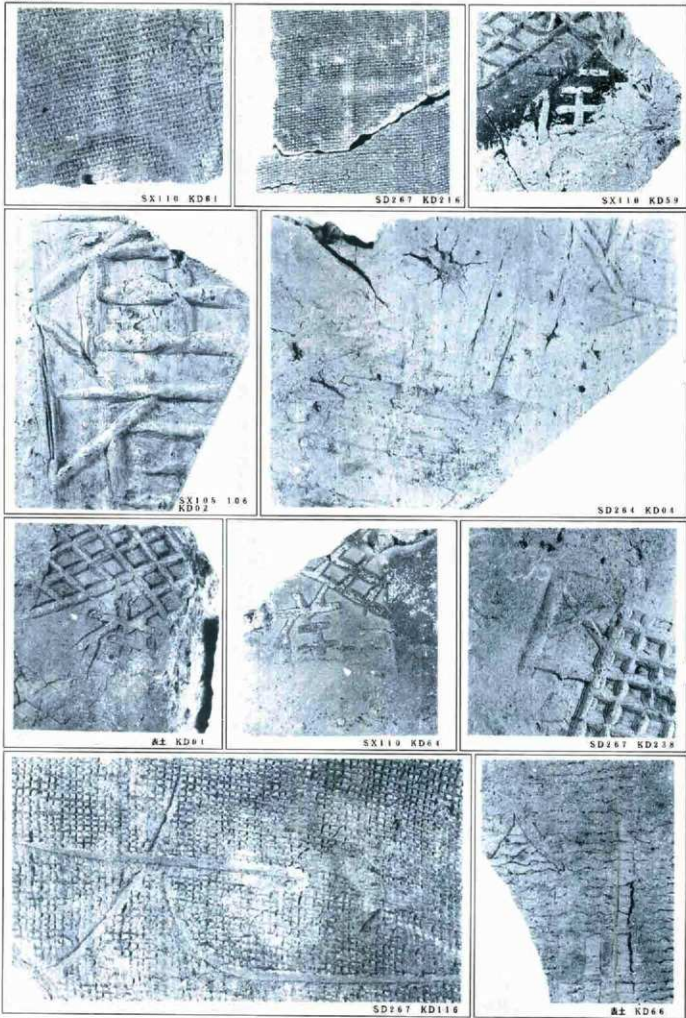


出土土器 (环1:2 要1:3)









国分寺市文化財調査報告 第42集

む かし こくぶん に し かと
武蔵国分尼寺跡Ⅱ

平成5年度発掘調査概報

発行日 平成7年3月31日

編著者 国分寺市遺跡調査団

© (団長 吉田 格)

発行所 東京都国分寺市教育委員会

〒185 国分寺市戸倉1-6-1

TEL 0423-25-0111(内)

印刷所 望洋印刷株式会社

令和3年(2021)9月8日 デジタル版作成

